The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古英詩 Juliana 試訳 (1)
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1985, 14, p. 245-252
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99092
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古英詩 *Juliana* 試訳（1）

金　山　　崇

ここに一部訳出を試みた*Juliana*の名で呼ばれる作品は，古期英語（Old English）写本のひとつ*Exeter Book*に含まれているもので，八世紀の作とされる宗教詩である。無名の詩が通常である古期英語時代にあって，Cynewulfなる名で知られる詩人は，自らの名をルーン文字で作品の一部にはめ込んでいることで有名であるが，*Juliana*も彼の作とされ，704，706，708の各行にルーン文字が入れてある。この文字の解釈にはいろいろ説があるが，ここでは触れないでおきたい。聖女ジュリアナが，キリスト教徒迫害で知られるローマのディオクレティアヌス皇帝（r. 284 - 305）の代に殉教するに至る経緯を描くこの731行から成る韻文作品への評価は，同じ詩人の他の作品*Elene*, *Christ* Ⅱなどに比べると高くなく，韻文よりむしろ散文に近く，筋の運びはよどみがないが，力強さ，感動に欠け，単調さが目立つ，などと言われ，Kemp Maloneなどは‘it is hack work, verse done to order (or so we make bold to conjecture)’と言い，R. Woolfは‘Competent in itself, though lacking the poetic mastery of the *Elene* or *Crist*, *Juliana* brings Old English poetry into a blind alley.’と評している。ともあれこの作品の中核ともなる，ジュリアナと悪魔との‘spiritual combat’（R. Woolf, p. 15）は，ジュリアナ伝説中，名高いもので，イギリスのいくつかの教会のステンドグラスやついたてには，ジュリアナがその足下に翼の生えた悪魔や竜を踏みつけている姿が描かれている（Oxford Dictionary of Saints, p. 227）という。

試訳の底本としたのは，R. Woolf編のMethuen版で，他に参照したものは次の通り。

（底本）Rosemary Woolf, ed.：*Juliana*

（参考）S. A. J. Bradley, tr. & ed.：*Anglo-Saxon Poetry*, Dent, 1982.

I. Gollancz, ed. : *The Exeter Book*, Oxford, 1895.
R. K. Gordon, tr.: *Anglo-Saxon Poetry*, Dent, 1954.
G. P. Krapp & E. V. K. Dobbie, eds. : *The Exeter Book*, Columbia Up, 1936.
K. Malone & A. C. Baugh : *A Literary History of England* vol. 1 The Middle Ages, Routledge & Kegan Paul, 1967.
T. A. Shippey : *Old English Verse*, Hutchinson University Library, 1972.

聴け。そのかみマクシミアン帝の御代(みよ)に起こりしことを雄々しき人ら公言し，豪胆の士ら世に告ぐるを我ら聞きしことあり。帝は慈悲の心これなき王君にして，広くこの中が世にわたりて迫害をこととなし，キリスト信者をあやめ，教会を打ち毀(こぼ)ち，異教の大将軍は，神ほむる者，高徳の聖(ひじり)，義を行う者らが血を草の野に流さしめたりと。帝の治むる処，広かつ大にして，その栄光は諸国民が上に燦(さん)と輝き，果てしなき地上の凡そすべてに及べり。帝に仕うる猛き者ら，君命に従い都々を駆け抜けぬ。彼ら邪なる心に神の捉(おさえ)憎む者，行いも邪に，ししばしば暴威を振るいぬ。憎しみをかき立て，偶像を掲げ，高徳の聖が命を奪い，学ある人らを滅ぼし，選ばれし人らを火に焼き，槍と炎もて神の戦士らをいたく苦しめぬ。（18）

富裕なるひとりの者あり。貴人の血ひく権勢高き総督にして，数々の城市を従える身，ニコメディアの町にほぼ常に住まいし，宝物を所蔵せり。彼しばしば神の御(み)言葉に背き，頻りに偶像を崇む。彼が名はエリューシアス，その勢力大にして名も高し。この人煩悩の火に焼かれ，ジュリアナなるひとりの乙女に熱き思いを懸け初めぬ。この女性(ひと)，心に敬虔なる信仰抱き，キリストへの愛がため，その操いかな罪にも穢(けが)されず，清く守らんとの覚悟は真摯(しんし)なりき。（31）

さてこの女性，その父の意により，かの富める人が許嫁とはされぬ。この若き女性，心中いかに男女の愛をさげすみしか，その事情を男は詳らかには知らず。この貴人の所有せる財がうち，宝物いかに積まれようと，乙女の心には，神への畏れまさりいぬ。さてこの富める人，黄金豊かに持つ男，乙女との婚儀挙げんと心逸り，家の花嫁として火急に仕度調えられんことを渇望せり。乙女この貴人が愛を固く拒みぬ，男この地上に金蔵が宝，数知れぬ宝玉，財を所有せしも。乙女これら皆てをさげすみ，大勢の人居並ぶうちにかく告げぬ。「御心を重ねて悩ませ給う要なきこと，私より申しあげます。もし貴方様が真の神を愛し，信じ，賞揚し，魂の護り主認め給うなら迷うことなく喜んで御心をすぐにでも御受けいたしましょう。又申し上げます，もし貴方様が，偶像崇拝の心もって，卑しき神にまこと信を置かれ，異教の捧げ物を約さるるなら，貴方様が許へ参ることはかないませぬ。又私を強いて妻になさることもかないませぬ。激しき憎しみこめて，いかな耐え難き苦しみ，苛酷な責め苦を用意されましょうと，今申せし言葉に私を背かせること，貴方様には決してかないませぬ。」（58）

これ聞くや貴人，激しき怒りを覚えぬ。罪深き所業に染まりし人，乙女の言葉を聞きぬ。さて狂おしく盲目となりし彼，足早き使いの者を遣って徳高き女性が父を呼び寄せ，策を尋ねんとす。彼ら武士，共に槍斜めに傾けしのち，その声は高まりぬ。義父に義息，二人ながら異教の徒にして，罪に病む者なり。国の護り主，心猛らせ槍握り，乙女の父に向かいてかく言いぬ。「そなたの娘我をはずかしめぬ。我が愛に，我が情けに，心惹かれず，とあたり憚らず言い放ちぬ。汝が娘，かくも耐え難き誹謗を人々が面前で我に浴びせ，我らのかねて認むる神々を差し置き，財貨をもて異教の神を崇め，言葉もて賞讃し，心に讃仰せよ，さなくば我汝のものとはならじ，と言いぬ。我が心この侮辱にいたく悲しみぬ。」（77）

この言葉聞き，気性激しき人，乙女の父は怒り，己が胸底の思いを披瀝す。「神の絶ゆることなき御恵みにあずかり，又殿よ，御身より祝宴の都々で御寵愛給わることを願いつつ，真の神かけて申す。御身の聞かせ給いし言葉もしま

ことならば，だれよりも愛しき人よ，娘をば容赦なく破滅に委ねまする，名声赫々たる殿よ，御身の御処分にこそ委ねまする。よしと思し召さば，死罪とするも生かさるるも，いずれなりと御心のままにされましょう。」（88）

乙女が父，激怒し，一途に思いつめ，邪なる闘志に燃えて，若きその娘が心楽しく住居すると承知の邸へ意を決して足を運びぬ。「お前は我が娘，我が思いのうちにては何物にも代え難く，愛しく，かつ優しきもの，この世にただひとり，我が眼の光なるジュリアナよ。汝愚かにも抗い，思慮ある人らが知恵に逆らいて無益な手立てを選びしものかな。汝花婿を甚だしく拒むは汝が未熟なる思慮が故なり。かの人汝に比ぶれば一段とまされる人，世の身分もより高貴に，宝もより豊かに持つ人なり。かの人に愛さるるは幸せなり。故にかの人が愛，その変らぬ愛をおろそかにせぬが得策というものぞ。」（104）

神の御加護受けし人ジュリアナ（この乙女かねて神に変らぬ愛を捧げたり）答えぬ。「御殿心を入れ替え，万軍の神を真の心に崇め，光，天と地，又数多海原の広がり，世の国々が広がりを創り成せし御方に，貢物もって愛をお捧げにならぬうちは，縁組に同意する心は決して私にはこれなく，又このことかなわねば，御殿私を館に迎えることはかないませぬ。御殿には，夫婦の愛は富もって他の女性に求めるべきこと，ここにては，かかる愛は御殿のものとはなりませぬ。」（116）

立腹せる父，娘に向かい怨もて応じぬ。飾り物ひとつだに約せざりき。「汝愚かなる振舞をやめず，なお異教の神崇め，我らに慕われこの民に力貸し給う神々を拒み，雄々しき御殿の願わるる婚儀に応ぜぬ時は，汝がその命の権利奪われ，やがて猛き野獣の爪牙にかかりて命果てんよう，我が命長らえて計るべし。汝ら如き者の我らが主君を侮るは，由々しく又災い招く所業なり。」（129）

神の御加護受け，思慮深く，神に愛でられし人ジュリアナ，その父に答えぬ。「父上にまこと申し上げます。この身生きてある限り偽りは申しませぬ。父上がお裁きを私は恐れませぬ。又父上が意趣含み私を脅かさるる恐ろしき刑罰の数々，裁きの恐怖も私は苦と覚えませぬ。又父上の邪なる所業によってキリスト讃仰より私を引き離すこともかないませぬ。」（139）

ここにおいて父，怒り心頭に発し，怒気凄まじく，憤怒，憤慨を娘に向けぬ。父，娘を笞打ち，拷問にかけ，刑罰に処せよと命じて更にかく言いぬ。「心をあらためよ，しこうして，先に，我らが神々への尊崇をさげすみて吐きし愚かなる言葉を取り消せ。」（ 146 ）

怖れ覚えぬ乙女ジュリアナ，魂の内なる思いこめて答えけり。「父上の御諭しいかにあれ，心惑すもの，口も利けず耳も聞こえぬ偶像，霊魂に仇なすもの，苦悩に手を貸す極悪の輩，これらに貢物捧げたりはいたしませぬ。私は，栄光の主，中が世の，又万軍の主を崇め，主に皆てを委ね，もって地獄の仇よりこの身を護り，助け，御救い頂くのです。」（ 157 ）

立腹せる乙女の父アフリカーナス，娘を仇共が手に，エリューシアスが手に委ねぬ。エリューシアス，夜の明けて光差し込むや，ジュリアナ裁きの座に連れ来たれと命じぬ。集まりし人々，乙女の美しき容姿に，こぞりて驚嘆の目を見張りぬ。かの貴人，花婿としてジュリアナにまずは優しき言葉をかけぬ。「何ものにもまさりて優しき我が陽の輝きなるジュリアナよ。よいか，そなたには輝ける美しさ，充ち溢るる気品，若さの栄光の備わりてあり。もしこれより我らが慈悲深き神々に仕えて身の護られんことを乞い，高徳の聖に支持求むれば，真の神々に貢物捧ぐる心汝になき場合に備えたる冷酷無残の刑罰数多，恐ろしき禍は汝の身にふりかかることなし。」（ 174 ）

高潔なる乙女，彼に答えぬ。「殿いかに私を脅かし，又いかに数々の刑罰用意されましょうと，心惑わす教え，偶像崇拝を殿がお棄てになり，栄光の神，霊魂が創り主，人の主（その御力が内に万物終りなく永遠に存するのです）をしかと認めらるることなくば，殿との御縁を喜こぶものではありませぬ。」（ 183 ）

そこで民の長，人々居並ぶうちに，心猛らせ，脅迫の言葉用いぬ。彼が憤激まさに甚だし。彼命じて，残忍なる刑により，乙女を一糸まとわぬ姿に臥せさせ，罪なきに笞もて打たしめんとす。ここでこの武者打ち笑い，さげすみの言葉を吐きぬ。「これにては，我らが争いも最初より勝負は明白。汝さきに軽々しき言葉口に出し，真の神々を愛すること甚だしく拒みしものの，我になお汝

の命赦さんとの意あり。よって，早々神々を心に迎え入れ，さきにさげすみの言葉ありしも，神々の嘉さるる供物捧げてその怒り鎮めよ。抗う心持たんか必ずやのちに報いが，恐ろしき拷問の刑が与えられん。争いを，傷つく抗いをやめよ。もしなお汝この事に，愚かにも過ち犯し続けんか，汝の敵対心に我止むなく，極悪の誹謗，由々しき冒瀆の怨みを汝に晴らさざるを得ず。汝この国人の久しく尊崇す神々，かってなき至善と深き慈悲の神々に争いを挑み初めぬ。」（ 208 ）

恐れ覚えず，高潔なる魂の主は彼に答えぬ。「悪しき事行う人よ，貴方の裁きも，貴方の下される刑罰の禍いも私は恐れませぬ。私の喜びは天の護り主，情深き保護者，万軍の主であり，神は私を貴方の欺瞞より護り，貴方が神々と考える荒々しきものらの毒牙より私を遠ざけ給うのです。その神々は何ひとつ美徳なく，空しく，取るに足らず，無益なもの。彼らに助け求むるも，そこに救いの手を真の平和を，いかな人も見出し得ませぬ。そこ悪魔らのうちに救いを見出すことはありませぬ。私の心は固く主と結ばれています。主は，栄光の君は，皆ての勝利の君は，とこしえに皆ての力を統べ給うのです。これこそ真の王であらせられます。」（ 224 ）

乙女の心を，その志を翻すこと能わざりしを，民の長は己が恥辱と思いぬ。彼命じて，乙女の髪懸けて吊り，高き架に揚げせしむ。日の光とまごう乙女，その姿にて，その日六時が間打たれ，とどまるところ知らぬ激しき迫害を忍びぬ。終るや憎き仇を架より降ろし，牢へ連れ行けと彼は命じたり。乙女の胸底に，柔和なる心に，キリストへの賞讃揺るがず包まれてあり，不屈の力なり。槌の業なる牢の扉は閂もて閉じられぬ。高徳の乙女その内にありて，闇に包まれつつも心に栄光の王，天上の神，人々が救い主をほめ讃えぬ。乙女には聖霊常に友なりき。（ 242 ）

突如その時，この牢内に入り来たりしは人類が敵，悪に長け，人の姿を装いたり。苦しみ与う技に通ぜし地獄の虜囚，高徳の乙女に語りかけぬ。「栄光の王に，我らが主にいと愛でられ，いと慈しまるる人よ，何故の苦しみなりや。この裁き下せし者の信ずる神々に分別もて供物を捧げ，その怒り鎮むる

心の汝になくば，筆舌に尽し難き刑罰，終りなき苦しみ手配されてあり。汝をここより引き出せの命を彼下(くだ)す時，急ぎ供物を，己が身救ういけにえを早々に捧げよ，さなくば破滅が，人々の面前での死が汝を奪い去らん。我が申せし手段(てだて)用うれば，汝神の御加護受くる乙女よ，この裁き下せし者の怒り免れ得ん。」（ 257 ）

ここで，キリストに嘉(よみ)されし女性(ひと)，恐るることなく直ちに，汝いずこより来たりしかと問いぬ。浅ましきこの者，乙女に向かいて言いぬ。「我は神の御(み)使いにして，天上より旅し来たれる者，高貴なる僕(しもべ)なり。天上より汝の許(もと)に遣わされし高徳の士なり。汝の命奪わん刑に，苛酷なる拷問，冷酷極まりなき刑の定められぬ。神，主の御子，汝にその身をいといて，かかる刑罰逃れよと宣いぬ。」（ 266 ）

この浅ましき者，栄光の敵なる者が言葉もて告げし意外の恐ろしき話に，乙女畏れおののきぬ。穢(けが)れ知らぬ若き乙女，心に迷いなく，断固として神に呼びかけぬ。「人々が護り主よ，永遠にして全能の御(おん)方よ，私の前に立つこの使者の伝えし恐ろしき御告げに言う如く，貴方の恩寵讃仰を棄つるが如きことを私になさしめぬよう，天使の父よ，貴方が創世に当たり創り成されし，貴き万物にかけてお願いいたします。そこで慈悲深き御(おん)方よ，空中を徘徊し，主を棄てて苛酷なる道歩めと説くこの僕は何者なるか，諸王の栄光よ，尊厳が護り主よ，願わくば知らしめ給え。天空より妙なる声して乙女に答え，かく告げぬ。「悪しき者を摑(つか)まえ，しかと放すことなく，彼が用向の如何を最初から一切，その生まれはいずこなるかを，嘘偽りなく白状させよ。」（ 286 ）

栄光の加護受けし乙女の心は喜びぬ。その手悪魔を摑(つか)みぬ。（ 288 ）

…… *　（ 続く ）

*作者 Cynewulf の用いた資料に近いひとつであろうと考えられているラテン語の「ジュリアナ伝」（ 6 世紀後半の作とされている ）に照らしてこの写本欠落部分一葉の内容を補えば，ジュリアナは悪魔を摑まえてその正体が Belial であることを白状させる。彼からアダムを堕落させ，カインにアベルを殺させ

るなど，ユダにキリストを裏切らせるまでに行った数々の罪を聞き出す，といった話である。（ R. Woolf ）。